

FD NAGASAKI JUNSHIN CATHOLIC UNIVERSITY Newsletter

第7号

長崎純心大学 教育開発委員会

発行日 2019(平成31)年3月1日

〒852-8558 長崎市三ツ山町235番地 TEL095-846-0084 FAX095-849-1894

(巻頭言)

FD に関して思うこと 1

FD に関して思うこと



学部長 潮谷 有二

大学・学生と地域の連携 2

【第3報】

●こども教育保育学科地域貢献事業～子育て講演会～

●地域に開かれた純心祭とゼミ企画の取り組み 2

海外の大学教育を考える 3
—学生の留学体験を通して—

授業紹介 4-5

●ICTを活用した授業を展開するために

●English Communication I・II - Course overview

●ソフォモア・セミナー

2017(平成29)年度教職員FD 6
研修会概要

2017(平成29)年度第2回 7
職員SD研修会について

2018(平成30)年度第1回 7
SD研修会報告

教育開発委員会 活動報告 8

編集後記 8

2018年度より学部長を拝命し、日々の業務に取り組んできているが、少子高齢化と人口減少が進行する今日の状況において、本学を取り巻く環境は依然として厳しい状況にある。しかしながら、このような厳しい状況に置かれている大学は、果たして本学だけであろうか。否、むしろ都市部の有名私立大学を除けば、地方の私立大学の大半は、濃淡はあるにせよ、本学と同様に厳しい状況に置かれていることは想像に難くない。推察の域を出ることはできないが、各大学とも必死になって、この難局を乗り越えるための取り組みをおこなっているに違いない。もし、そうでないならば、日本の社会経済状況や文教政策の方向性に鑑みても、これから将来にわたって、そのような大学が存続し続けるということは難しいのではなかろうか。

周知の通り、日本政府は、大学改革と称して様々な政策を講じてきており、2018年11月26日には、大学の在り方そのものを抜本的に見直すことを主眼に据えた『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)』(以下、「答申」という。)が中央教育審議会から出された。今後は、当該答申に基づく大学改革が強力に加速し、推進されていくことになるといえよう。

特に、近年取り上げられるようになった国公私立の枠を超えた連携の推進とその仕組み作りは、今後の大学経営の在り方と私立大学の存立そのものに大きく関わってくる政策である。答申においても下記のように記述されている。

「さらに、これらの各大学におけるマネジメント機能や経営力を強化する取組に加え、複数の大学等の人的・物的リソースを効果的に共有すると同時に教育研究機能の強化を図るため、一法人一大学となっている国立大学の在り方の見直し、私立大学における学部単位等での事業譲渡の円滑化、国公私立の枠組みを越えて大学等の連携や機能分担を促進する制度の創設など、定員割れや赤字経営の大学の安易な救済とならないよう配慮しつつ、大学等の連携・統合を円滑に進めることができる仕組みや、これらの取組を促進するための情報の分析・提供などの支援体制の構築など実効性を高める方策について検討することが必要である。

なお、今後は、学校法人に対して、経営改善に向けた指導の強化や経営困難な場合に撤退を含む早期の適切な経営判断を促す指導を実施する。また、破たん処理手続の適正化による学生保護の充実を図る。答申：p.23引用」

さて、2019年は、大学創立25周年の記念すべき年である。2015年の学園創立80周年以降の学部再編に加え、2019年度からは、いよいよ全学科で男子学生の受け入れが始まる。

上述したように、本学を取り巻く厳しい状況の中で、本学が創立の理念と歴史を基盤に据え、長崎の地における唯一のカトリック大学として将来にわたって、その使命を果たし続けていくためには、一人ひとりの教職員が自らの問題意識を持ってSD、FD、IR活動に主体的に取り組んでいくことが必要不可欠となる。これらのこと無しに想定される難局を乗り越えることは不可能であるということを指摘しておきたい。



公益財団法人大学基準協会
大学評価適合認証





大学・学生と地域の連携



こども教育保育学科地域貢献事業～子育て講演会～

「ママも子どももハッピーになる子育て」野本 美和子（こども教育保育学科准教授）

こども教育保育学科では、毎年7月に地域貢献事業として子育て講演会を実施しています。現在子育て中の保護者を対象に、託児サービスを伴う講演会を実施することで、自分を振り返ったり、ほっと一息ついたりできる空間を提供して地域貢献につなげています。場所は長崎市扇町の長崎純心大学地域連携センターで、地域の方が参加しやすい環境を整えています。

本年度は7月13日に実施しました。長崎純心幼稚園の保護者の方やホームページをご覧になって参加された地域の方もいて、少人数の参加を生かして一人一人のお話を伺いながら、日頃の子育ての悩みや考えについて話し合うことができました。



子育ては本来は楽しいものですが、思い通りにいかないことも多く、保護者の方のご苦労は絶えません。子育て中の方が同じ空間を共有することで、悩んでいるのは自分一人ではないことに気づいたり、改めて我が子のことを愛おしく感じられたりして、お母さんが元気になり、気持ちにゆとりを持って子どもと向き合うことができるようになります。

お母さん方がゆっくり安心して話し合いができるように、別室では大学の教職員や学生達が託児を行い、地域貢献に尽力しました。

今後も地域の方々のお力になれるよう、小さなことを積み重ねながら信頼される大学を目指していきたいと思えます。



地域に開かれた純心祭とゼミ企画の取り組み

原田 康英（こども教育保育学科教授）

純心祭は、学生が主体となって運営を行い、学生発想の企画により、学生相互や地域の皆さんに楽しんでもらうことを目指してきました。一方で、情報発信力の不足や、内容のマンネリ化から、“内輪のお祭り”と化している一面も見受けられる状況がありました。

近年、これらの問題を打開すべく、学生による実行委員から、「地域へ開かれ、地域と一体となった純心祭を目指そう」との気運が高まり、子ども向けの企画をはじめ、様々な年齢層の方々に楽しんで頂けるような内容を工夫する動きが活発化しています。そのような中、第53回純心祭においては、「3学科制となった新しい長崎純心大学を地域へ発信したい」との思いも込め、テーマを「SHIN—新たに彩る純心—」とし、自分たちの学びを地域へ発信する企画を充実させる方向で検討を重ねてきました。

今回、ゼミ担当教員の方々の協力をいただきながら、3年の全ゼミによる学びの情報発信並びに実演や装飾等の企画を実現できたことは、これからの純心祭の在り方の大きな転換点となっていくのではないかと感じています。



純心祭の当日は、実演・体験系の取り組みとして、心理学体験コーナーや児童劇、ミュージカルなど13ゼミ、展示・研究発表系の取り組みとして、地域包括ケアと多職種連携に関する研究発表やトリックアート、留学紹介の3ゼミ、ゼミの内容と関連させた出店として食品等の模擬店が11ゼミ、校舎内の装飾に関する協力が11ゼミと、全てのゼミに協力をいただき、長崎純心大学の学びを発信する機会を持つことができました。

協力していただいた先生方、主体的な取り組みで純心祭を盛り上げ、情報発信を行った学生の皆さん、ありがとうございました。



海外の大学教育を考えるー学生の留学体験を通してー

滝澤 修身 (比較文化学科教授)

2018年10月から比較文化学科の2年生田中寿来さんと和田育恵さんがスペインのアルカラ大学に単位互換留学に行っています。彼女たちは、アルカラ大学の語学学校アルカリングアに属し、スペイン語やスペイン文化を勉強しています。それでは、彼女たちにスペインの授業の特徴について述べてもらいましょう。日本での語学教育と比較してみると、海外での語学教育の特徴や見習うべき点が明らかになってきます。

アルカラ大学

比較文化学科2年 田中 寿来

私がスペインの授業を受けて一番に感じたのは、会話などの体験、経験中心の授業が多いということです。日本の大学では、どちらかというと座学中心の授業が多く、知識を始めに学ぶという印象があります。しかし、こちらの学校ではまず始めに知識ではなく、会話をしたり、経験や体験をさせたりすることに重きを置いているように感じます。知識を後から学ぶことで、学んだ事を知識として留めるだけでなく、経験、知識と結び付けることでスキルとすることができると感じました。また、グループワークや教師との会話の機会も数多くあります。クラスメイトと教師の距離間が近いことにより、疑問が生じた場合、質問をしやすい空間が生まれています。このように、スペインでは学生のスキルを向上させ、日常的に使える知識を学ぶ機会を与えていると思います。



比較文化学科2年 和田 育恵

アルカリングアに短期留学に来て、早くも1ヶ月が経とうとしています。私のクラスはスペイン語の基礎から学ぶことのできるクラスです。ベトナム人、ドイツ人、フランス人、トルコ人、中国人と、とても国際色豊かです。授業は文法と会話の2つがあります。私が実際に授業を受けて日本の授業と異なっていると思った点は、とにかくたくさん会話をすることです。アルカリングアの先生は1つの問題につき、たくさんの質問を私たち学生に投げかけてくださいます。例えば、1つ文法や単語を学べばその都度、それを活用した質問を私たちにして、一人ひとり答えていかなければなりません。皆、自分なりの答えを出すので、友人の活用の仕方を聞いて学ぶことができます。また、学んだことをすぐに会話として活用することで、文字でノートに書くより、しっかり頭に入れることができているように感じられます。



このようにアルカラ大学のスペイン語の授業の特徴は、徹底した会話練習など体験型の授業にあるようです。

授業紹介

ICTを活用した授業を展開するために……吉田 麻衣 (こども教育保育学科助教)

情報処理リテラシーの講義は、基礎科目の必修科目として位置づけられています。「情報処理リテラシー」とは、コンピュータ操作能力に加え、数多い情報の中から自ら求める情報を取得し、その情報を的確に分析、判断、活用する能力のことであり、本科目のねらいは、Windows環境において、電子メールの利用やホームページの閲覧・検索、文書作成などの基本を学び、それらの習得を通じ、情報処理の基礎知識も学ぶことにあります。

授業の中では、表や図を含んだビジネス文書作成の技術を身につけるとともに、パソコンやネットワークに関するものなどの基本的な知識を学びます。

授業の最後には毎回、Google フォームにて学生に対し、講義の感想や要望を尋ね、回答内容によってはその日のうちにフィードバックをすることもあります。基本的には翌週にフィードバックすることで、前週の振り返りにもつなげています。そして、Google フォームによって、教員と学生とのより円滑なコミュニケーションを促し、学生が教員に直接言いづらいことを拾う機会や学生自身が授業を振り返る機会、教員が授業を改善することにも繋がっていると考えます。

また、時間の許す限り、Microsoft Word だけでなく、Google Suite の機能やフリーソフトウェアアプリケーション等



授業感想を得るための Google フォーム

の様々なツールを紹介することで、目的や手段に合わせてツールを取捨選択し、使用できる力、情報を的確に分析、判断、活用する能力を養うようにしています。

今後も改善を繰り返し、授業を充実させていきたいと考えます。

English Communication I・II – Course overview

…………… Jeff MacPherson (英語情報学科講師)



English Communication is a General English course that aims to provide students a whole language approach to language learning. In this course, learners read, listen, write and speak English. The focus is generally more on oral/verbal communication than written communication, but learners will still have opportunities to write short texts such as emails and postcards.

During lessons, the teachers restrict the amount of Japanese that learners use, and they themselves also grade their language so that if Japanese is needed, it is only used to help with difficult vocabulary or commands that might be unfamiliar to the learners.

The learners are given opportunities to work in pairs and groups in order to increase communicative exchanges and further promote speaking and listening practice. General quizzes and end of unit tests are completed alone, but students are often allowed to check and discuss answers upon completion.

The actual course content is based upon situations

that are possible for the learners to encounter in Japan: exchanging basic personal information, talking about hobbies and interests, asking and giving advice, and expressing likes and dislikes to name a few. By presenting language in familiar and useful contexts, it is expected that the learners will be more interested and motivated to participate, study and use English more willingly.

Individual learner needs, interests and levels of motivation vary, so class groups are organized with respect to such factors. The teachers informally survey the learners in the first lesson of the course, and that data is then used to help place students accordingly.

With limited exposure to English, it is not expected that learners will be able to greatly increase their ability. Regardless, by creating friendly, enjoyable learning environments, the teachers aim to spark interest and maintain learner motivation that will hopefully result in the learners becoming more independent in their study and use of English language and understanding of cultural differences beyond the classroom.

要約 English Communication I・II

(地域包括支援学科、こども教育保育学科対象)

基礎科目の言語・コミュニケーション部門の必修科目である English Communication I-II は英語の「読む」「書く」「話す」「聞く」の4技能を統合した英語科目である。英語で Email や絵葉書を書くなどの簡単な「書く」活動もあるが、授業の重点は「話す」「聞く」に置かれている。

授業では難しい単語の説明等の時以外は学生の日本語使用は極力制限される。英語でのコミュニケーション活動を活発に行うためにペアワークや3～4人の小グループでの会話練習が頻繁に課される。また一つのユニットが終わるごとに小テストを実施している。

具体的な授業内容はテキストに沿って、学生たちが日常生活で経験すると思われるさまざま状況を設定し、そ

の状況において適切な英語でのコミュニケーションを学んでいる。例えば個人の日常生活での情報交換、趣味の話、悩み事へのアドバイス、食べ物などの好き嫌いなどをテーマとし、それぞれのテーマに相応しい英語表現を練習する。

学生間の英語力、英語への興味関心、学習意欲などにかなりの差があるので4月の最初の授業時に簡単な調査を実施し、その結果を基にクラス分けを行っている。

学生たちは授業外で英語を使う機会がほとんどないので、この授業のみを通して学生たちの英語力が飛躍的に向上することはあまり期待できない。しかし、それに関わらず楽しい雰囲気の中で英語でコミュニケーションすることを通して、学生たちの英語学習への意欲が高まり、自ら英語学習に取り組み、さらに異文化に対する興味関心が高まることを期待している。

要約 畠山 均 (英語情報学科長)

ソフォモア・セミナー..... 坂本 雅彦 (こども教育保育学科教授)

この科目は、こども教育保育学科 (2017年度まで児童保育学科) の2年次必修基礎科目として、通年で計15回 (水曜隔週) の授業を行うよう設定されています。今年度の実施体制としては、筆者を含む5名の学科教員が常任スタッフとして運営の任にあたり、個々の授業の実施にあたっては計10名の教員が参画しました。

卒業後に教師や保育士など「先生」と呼ばれる職業に就く確率の高い学生たちにとって、専門的な知識技能の修得と並んで、より基礎的な人間性を磨くことが求められるの言うまでもありません。その「人間性を磨く」ということを「より活動的・能動的(active)で、創造的 (creative)で、かつ他者と関わることのできる (communicative)人間になること」と言い換え、この意味での学生の人間的成長を、教員一同、スクラムを組んで支援していきたいという思いが、本科目を動かす原動力となっています。

上述の目的と、学生たちの取り組む内容である諸種の「プロジェクト」(社会的に有意な活動)、そして評価方法 (ポートフォリオ評価) の三者が有機的に関連し合うところに、ソフォモア・セミナーは成り立ちます。2018年度においては、以下の4種のプロジェクトを学生たちの取り組むべき課題と決めました

①「**菜園プロジェクト**」・・・学内の畑でサツマイモを栽培すると共に、家では、食べ終わった野菜や果物の種を土に播いて発芽・生育させることにチャレンジする。

②「**お掃除プロジェクト**」・・・掃除の実践計画を立案し、着実かつ継続的に実行する (掃除場所は自宅でもそれ以外でも可)。

③「**チームプロジェクト**」・・・6名以内の学生チームごとに、地域の子どもたちと関わりながらボランティアの立場で活動する計画を立案し、メンバー間および活動先事業所との綿密な打ち合わせの下で遂行していく。

④「**コーラスプロジェクト**」・・・大学行事 (入学式・卒業式と創立記念の式典) に際し、全員で聖歌隊を務める。これらのプロジェクトに伴う諸々の実践の



うち、あるもの (コーラスの練習など) については授業時間の枠内で行うこともありますが、授業時間は多くの場合、プロジェクトの遂行に必要な教員側からの最低限の説明や助言、または、学生たち自身による計画立案や話し合い、進捗状況と活動成果の報告・振り返りといった作業のために費やされます。つまり、活動そのものは授業時間外の、学生たちが自分の自由になる時間を見つけて自主的に展開することになります。それゆえ当然、学生によって熱心に取り組む者とそうでない者の差が大きく出ることが懸念されますが、この点に関するスタッフの考え方は以下のとおりです。

第一に、そもそも学生には一人一人個性がある以上、取り組み方に「差」が見られるのはある意味当然であり、そのことを専ら否定的な目で見ること (皆が皆同じように、同じだけの努力をしなければならぬと考えること) 自体、いかなるものかということです。

第二に、教員スタッフとしては、そうした学生間の個人差を認めた上で、課題への取り組みが鈍い学生を殊更に注意するのではなく、あくまで学生本人が自己の現状に気づき、自ら「変わりたい」と望むようになるための機会を、授業計画や方法上の工夫を通じて頻繁に設けることが必要と考えます。そのためポートフォリオの構成要素として「自己評価シート」への定期的記入を義務づけたり、学生が互いに他の活動状況を聞き合う場を頻繁に設けたり (年間授業計画のうちに4回の「ポートフォリオ報告会」と、「チームプロジェクト」関連で構想発表・中間報告・最終報告の3段階の発表会を組み込む) して、学生たちの意欲喚起に努めています。

教職員(FD)研修会報告

—2017(平成29)年度教職員FD研修会概要—

2017年度 教育開発委員長 足立 耕平

(人間心理学科教授)

2018年3月13日(火)に2017年度長崎純心大学教職員FD研修会を開催しました。本年度の研修会は「障害のある学生の理解と支援 ～全学的な支援体制の構築を考える～」をテーマとして実施しました。

午前は広島大学大学院総合科学研究科教授でありアクセシビリティセンター長である佐野真理子先生より「障害のある学生への支援：広島大学の事例から」との演題でご講演いただきました。障害者差別解消法や合理的配慮についてのご説明の後、広島大学における障害学生の支援のニーズと合理的配慮の例を紹介していただきました。また、合理的配慮の決定プロセスと紛争予防についてもお話いただきました。合理的な配慮の決定は建設的な対話に基づくものであること、また、障害のある学生だけではなく全ての学生にとっての権利を保障するという方針が望ましいことなどが印象に残りました。

午後は入試委員会、教務委員会、学生委員会、キャリア委員会など7つのグループに分かれ、午前の佐野先生のご講演を受けて、障害のある学生への対応に関する本学の現状および問題点について話し合い



ました。その後、全参加者が集まり、各グループからの報告をもとに本学における今後の課題についてディスカッションを行いました。ディスカッションには佐野先生にもご出席いただき、多くのご助言をいただきました。

2018年度から学内に「特別の配慮を必要とする学生支援チーム」が設立され活動を始めています。今後、具体的な対応を進めながらあらためて様々な課題が浮かび上がってくると思います。今回の研修会を通して、全ての教職員がそれぞれの立場で支援に携わる意識を持ち、対応をしていくことが必要であると感じました。ご講演いただきました佐野先生、誠にありがとうございました。ここに記してあらためて感謝の意を表します。



【参加者の声 (事後アンケートの自由記述より抜粋)】

- ・ 学生に対する支援体制を整えることは、それに対応する教職員に対する支援にもなり、教育を充実させるために重要なことだと思います。
- ・ 合理的配慮について改めて整理することができました。目的、内容をはっきりさせ柔軟に対応すること、一人一人の状況を理解し行うことの大切さを感じました。
- ・ 障害の有無ではなく、大学そのもののアクセシビリティを考えるきっかけになりました。
- ・ 「完璧より改善を目指せ」の言葉を大切にしながら

一人一人の障害に合わせた支援や配慮ができればいいなと思いました。

- ・ 対策システムの必要性もさることながら、教員個人の良識や対処能力の必要性も感じました。
- ・ 障害学生の対応が問題化されている中でタイムリーな研修内容でした。一堂に会して議論できたことで共通認識を持つことができました。
- ・ グループ討議のグループ分けが委員会、部署別に組まれていたのは、それぞれの視点での討議となり、新しい試みであったと思います。

2017(平成29)年度 第2回 職員SD研修会について

2017年度SD委員 岩崎 由希子
(図書館情報センター事務室長)

2018(平成30)年3月13日(火)に、第2回職員SD研修会を開催しました。

研修テーマは、「本学の国際関係業務の実態について」としました。今後の国際化へ対応するため、職員も語学研修などを行う必要がありますが、まずは、国際関係業務に携わる国際課と学生支援課(留学生担当)の2課から、本学の現状及び実務内容を報告していただきました。

国際課からは、派遣留学や海外協定校への実習などに関わる実務、協定書の管理、海外協定校からの留学プログラム等の留学生受け入れに関わる実務についての報告でした。また、学生支援課(留学生担当)からは、受入

留学生の入管手続きや留学生としての受入に関わる実務などについての報告がありました。

1時間程度の短い研修会でしたが、これらの報告により、職員が情報を共有でき、今後の国際化を考える上で、の事前準備に多少でもなったのであれば幸いです。

国際化を達成するために職員としてできること
(参加者意見：抜粋)

- ・語学力をスキルアップする。
- ・多文化理解に努める。
- ・留学関係の法令、制度などの基礎知識を持つ。

2018(平成30)年度 第1回 SD研修会 報告

坂本 雅彦
(2018年度SD研修実施専門部会長)

大学設置基準第42条の3に基づく、いわゆる“教-職共同(=教員と事務職員合同)のSD研修”が、2018年8月20日(月)の午前10時より午後4時まで、本学S205教室を会場として開催されました。当日の参加者は本学の専任教職員に加え、姉妹校である鹿児島純心女子大学・鹿児島純心女子短期大学の職員の方々や、系列の高校・中学校・幼稚園にご所属の方の姿もあり、合計88名でした。

午前の部(10:00~11:30)のプログラムは、学長挨拶に始まり、事務組織の各部署からの報告ということで、事務局長、財務課長、教務課長、学生支援課職員代表、キャリアセンター事務室長の5名が順次登壇し、それぞれの視点から全学的な情報共有ないし問題意識の共有が必要と思われる事柄について説明がありました。銘々の持ち時間が短かったため深みのある議論にまで踏み込めなかったことが残念ですが、例えば財務課長の報告は、本学の収支等の実態を示すデータをリアルに提示することで危機意識を喚起し、状況の打開へ向けた行動が急務であることを全教職員に納得させることに貢献したと思います。また、障がいのある学生への修学上の配慮に係る教務課長からの問題提起や、学生支援課からの、地域社会に貢献する学生たちの活動を支援する体制づくりに



関する提案なども、フロアにいる多くの教職員の共感を呼んだようです。

午後の部(13:00~16:00)は、本学が2019年度

入学者からいよいよ“全学科男女共学”体制に移行することにちなみ、《新時代の長崎純心大学を展望する》とのテーマを掲



げて2つのプログラムを企画し実行しました。

まず、先行大学の経験に学びたいという趣旨の下、2004年度に全学的男女共学化を果たした聖カタリナ大学より会計課長池田哲様をゲストにお招きし、90分の講演をお願いしました。大変具体的かつ有益な示唆を多数与えていただきましたことを、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

午後の部後半は、従来より本学で男子学生を受け入れていた唯一の学科である(旧)現代福祉学科の卒業生で、現在、福祉の専門職に就き社会で活躍中の男性3名をゲストに迎え、在学中の思い出や、大学での経験と現在の生活とのつながり等について話していただくという、シンポジウムの形式(卒業生3名が話題提供者、本学の各学科を代表する教員3名が指定討論者として並んで登壇)で行いました。このシンポジウムを通して、教職員側の学生対応として必要なのは過剰な世話焼きではなく、学生が(男女問わず)自分の居場所や活躍の場を自ら創造できるような環境や条件を整えることなのだと気付かされました。また、卒業生の一人が語った卒業生の「ネットワーク」構築への期待も、SNSの普及した今日、本学として大いに検討する価値のある提案であると感じました。

教育開発委員会 活動報告

2017（平成29）年度

■教育開発・IR委員会

第7回 平成29年10月4日 第8回 平成29年11月1日
第9回 平成29年12月13日 第10回 平成30年1月17日
第11回 平成30年2月21日

■学生による授業アンケート

前期 平成29年7月20日～8月4日
後期 平成29年1月23日～2月5日
※教員へフィードバックアンケート実施
集計結果の公開（本学ホームページ、学内スタッフサイト掲載）

■教職員による授業参観

前期 平成29年6月5日～6月16日
後期 平成29年12月4日～12月15日
※教職員へフィードバックアンケート実施
集計結果の公開（本学ホームページ、学内スタッフサイト掲載）

■教職員 FD 研修会

「障害のある学生への支援－広島大学の事例から」
平成30年3月13日(火)10:00～15:30
※教職員へのフィードバックアンケート実施

2018（平成30）年度

■教育開発委員会

第1回 平成30年4月11日 第2回 平成30年5月23日
第3回 平成30年6月13日 第4回 平成30年7月18日
第5回 平成30年9月12日 第6回 平成30年10月17日
第7回 平成30年11月14日 第8回 平成30年12月5日
第9回 平成31年1月23日 第10回 平成31年2月20日

■学生による授業アンケート

前期 平成30年7月20日～8月4日
後期 平成31年1月21日～2月6日
※教員へのフィードバックアンケート実施
集計結果の公開（本学ホームページ、学内スタッフサイト掲載）

■教職員による授業参観

前期 平成30年6月11日～6月22日
後期 平成30年12月10日～12月21日
※教職員へフィードバックアンケート実施
集計結果の公開（本学ホームページ、学内スタッフサイト掲載）

図書・雑誌の案内

※教育開発推進室所蔵の図書や雑誌の貸出しを希望される方は、図書館で手続きを行ってください。

■定期購読雑誌等

「高等教育研究」日本高等教育学科会編 玉川大学出版部発行
「IDE 現代の高等教育」IDE 大学協会発行

■新着図書

今年度、教育開発室に新刊27冊を購入しました。どうぞご利用ください。

編集後記

平成30年度は新三学科編制が始まった。それに向けて多くの課題を平成29年度から議論し、取り組んだ。ハンディキャップ生の活躍、海外交流、財務安定、授業アンケート、地域子育て、話す英語・聞く英語、ICT活用授業、菜園プロジェクト、聖歌隊プロジェクト、純心祭ミュージカル、卒業生交流など、多彩な中の僅かな報告がこの平成最後のニューズレターである。次年度から全学科男子受け入れとともに、純心は新時代を創り出し、ますますFDの重要性が高まる。男女共生、世界多元化などの一方で、知らぬ間に電子ビッグデータ管理・DNA操作の時代が眼前に迫り、長崎にもその大波は押し寄せるのか。地域に根ざす純心が、地道に健全な教育を進める努力はつづく。

石井 望（文化コミュニケーション学科准教授）

平成30年度教育開発委員会

原田康英(委員長) 坂本雅彦 石井望 奥村あすか 中満英子

長崎純心大学 教育開発委員会

〒852-8558 長崎市三ツ山町235番地 TEL095-846-0084 FAX095-849-1894 URL <http://www.n-junshin.ac.jp/univ/>